



2020 (令和二) 年2月1日 (土)

藤 棚

第378号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

「新型肺炎」を^{せんめつ}殲滅しよう

校長 小川義男

中共(中華人民共和国)で発生した新型肺炎は、既に同国を離れて世界全体に拡散する気配がある。日本でも、中国人を搬送したバスの運転手が、感染、発病した模様である。

私は、大学時代にバスの車掌をやっていた。とても楽しい仕事だった。そのときは運転手にかわいがられたが、いずれも立派な方たちであった。冬季、北海道のバスは、頻りにチェーンの着脱をしなければならない。大変な仕事である。しかし彼らは、車掌である私には絶対に手伝わせず、厳寒の中で黙々と1人で仕事をした。内緒だが、最終、十二時半頃のバスでは、こっそり運転させてくれた。真駒内米軍基地内のバスである。今でも、運転手さんの名前は全部覚えている。本当に尊敬できる人々であった。

ガイドは高校卒だから生意気だった。私は嫌いだった。

そのバス運転手が、中国人を乗せて、長距離を走り罹患したというのだから、我が事のように悲しい。早く回復してほしいと、心から願う。

中共政府の動きは素早かった。全力を挙げてウイルスの世界への拡散を防ごうとしている。私は、ちょっと「独裁国家も悪くないな」と思った。

肺炎だから苦しい。何としても、力を合わせて、この病魔と戦わなくてはならぬ。

大切なのは、徹底した手洗いだと思う。手首まで石鹸で丁寧に洗い、うがいを励行することだ。受験生には、特段の配慮が求められる。

もう一つ大事なのは湿度である。乾燥はウイルスへの援軍となる。

可能な限り太陽光線を室内に入れること 睡眠と栄養

昔はコレラやチフス 結核が人口を減らした。病魔に対しては、科学的な姿勢で戦っていこう。

迫り来る危機の中で日本の国益を守ろう

アフガニスタンで日本人名医が殺された。医者の仕事だけでなく土木工事まで自分でやった。

そんな立派な人をなぜ射殺したのか。おそらく彼が、クリスチャンだったからであろう。

イスラム教もキリスト教も、他宗派の信徒を殺せとは教えていない。宗教が殺害の理由となる。ここに現代の恐ろしさがある。信教の名のもとに殺人を肯定する。我々は、このような傾向を、断固として非難しなければならぬ。

人口減が進む中で、政府は「人材」と称して外国人労働力の導入を進めている。無思慮、無責任である。大量に導き込まれる外国「人材」からは、膨大な数の子供が生まれる。この人々に国籍を与えるべきだと主張する人々が多発することは目に見えている。

田園のおおらかさ、気配り、心遣いの日本は滅びるであろう。日本に定着した強烈な一神教が、暗殺、他殺の風土をもたらす危険は決して否定できない。

宗教は尊いものだが、それを名として殺害を正当化する一神教的狂信の場合、絶対に否定しなくてはならない。政府の軽率な「外国人材導入」をどう非難する。

イカが獲れなくなった。我が国の排他的経済水域、特にヤマトタイに南北朝鮮 中共の漁船が進入し、軍艦がこれを守っているためである。政府は、彼らを断固として排撃、除去しなければならぬが、今日の世相には、「譲って争いを避ける」気配が感じられる。

日ロの間に、歯舞色丹の極小二島で妥協しようとする気配がある。北方領土とは、実質的には択捉、国後の二島のことである。一時の政治的利害のため、北方領土をロシアに渡そうとする者は売国奴である。

世界が見ている。もし極小二島で妥協すれば、世界は「なるほど、日本人は占領されてしまえば諦める国民なのだ」と思う。遠からぬ将来、ロシアは北海道に上陸してくるであろう。売国奴思想とは、そのように恐ろしいものなのだ。

政治家は、政治生命の延長のために国を売ってはならぬ。選挙民は、国を売って政治生命の延長をはかるような政治家を許してはならぬ。

防衛大学校、海上保安大学校、防衛医科大学校、若者は率先してこのような大学に進み、国家国民を守るという気概に燃えなくてはならぬ。

先日のテレビで、ある政党代表が「偵察機を送って日本の輸送船を守れるのですか」と騒ぎ立てていた。守れるとも！現に防犯カメラは、攻撃力はゼロだが劇的と言えるくらい犯罪暴圧に貢献しているではないか。

それに貢献の度が、仮に低いとしても、それなら君らは、いかにして我が国の大切な石油輸送船を守ると言うのか。

戦後 75 年になる。いつまでも「敗戦憲法」に執着してられる情勢ではない。国益を守るため、野党こそ、真に改革的戦略を確立しなくてはならぬ。国民は、現下の国際情勢に対応できる健全な野党の出現を待っている。野田元総理は尖閣諸島を守るため、命を賭して、その国有化を実現した。中共は騒ぎ立てたが、彼は命を賭していたのだと私は思う。

与党であれ野党であれ、国益を守るため死する覚悟が今求められている。国民は、そのような政権、政党の出現を待ち焦がれているのだ。

片々たるヤジの責任を迫及するようで、国益を貫くことはできない。

与党にも野党にも、今求められているのは国家のために死ぬ覚悟である。政治家にはそれがあって当たり前だ。

本校生徒諸君の中から、国のために死ぬ大政治家よ、出よ！